50th Anniversary Special 対談

加藤久智 × 瀬古利彦

成長の源泉を紐解く

数々のマラソンの国際大会で優勝し、
3度のオリンピック代表に選ばれたレジェンドランナー・瀬古利彦さんと、
加藤久智社長が成長をテーマに若手世代に伝えたいことを語り合います。

失敗のない人生などあり得ない。
あらゆる成功は多くの失敗の積み重ねで成り立っている。
失敗から得られる学びは、実に多いのです。

瀬古利彦（せこ としひこ）

プロフィール

- □1956年三重県桑名市生まれ
- □1976年早稲田大学教育学部入学
- □1978年福岡国際マラソン優勝
- □1979年ボストンマラソン2位
  （当時の日本学生新記録を更新）
  同年福岡国際マラソンを連覇し、
  モスクワオリンピックの代表に選出される
- □1980年大学卒業と同時にエスビー食品に入社
- □1983年東京国際マラソン優勝
  同年福岡国際マラソンで優勝し、
  ロサンゼルスオリンピックの代表に選出される
- □1984年ロサンゼルスオリンピック出場
- □1986年ロンドンマラソン優勝
- □1986年シカゴマラソン優勝
- □1987年ボストンマラソン優勝
- □1988年びわ湖毎日マラソン優勝
- □1988年ソウルオリンピックに出場し、同年引退
- □2023年現在公益財団法人日本陸上競技連盟副会長
  兼、ロードランニングコミッションリーダー
  DeNAアスレティックスエリートアドバイザー

※メディア出演や講演会、マラソン大会のゲストランナーなど、
活躍の場を広げて、マラソンやジョギングの魅力を発信

自分の力ではどうにもできない場面に遭遇することもある。
運を天に任せることになった時に、求めていた結果が出なくても、
引きずらないことが一番だと思います。

加藤久智（かとう ひさとも）

プロフィール

- □1967年三重県桑名市生まれ
- □愛知学院大学大学院文学部文学研究科
  宗教学宗教史学専攻 修士課程修了
- □南山大学大学院ビジネス研究科
  ビジネス修士課程修了（MBA）
- □株式会社ほくせい代表取締役社長
- □株式会社花のホクセイ代表取締役
- □株式会社秋桜・秋桜交通代表取締役
- □有限会社秋桜HD代表取締役
- □全日本葬祭業協同組合連合会
  副会長/理事
  第20代青年部会部会長
- □三重県葬祭業協同組合 理事長
- □厚生労働省認定技能審査葬祭ディレクター1級
- □KHK ISO審査センター 専門技術者
- □経済産業大臣認可全葬連認定
  葬儀事前相談員
- □日本宗教学会 正会員
- □日本葬送文化学会 正会員

常にポジティブであることが大切。ピンチはチャンスです。（瀬古）

【加藤】　2022（令和4）年春、株式会社ほくせいは創立50周年を迎えました。半世紀にわたり事業を続けてこられたのも、皆さまから多くのご厚意を賜ることができたからだと思っております。

　我が社は、2017（平成29）年に創立45周年を迎え、その翌年、次の節目に向かって邁進するべく本社を桑名市蓮花寺に移転させました。以降、50周年を迎えるまでの5年の間には、エンディングサポートセンター寺町を開設したり終活ゼミを発足したり。さらに、グループ会社の株式会社秋桜でもエンディングスペース事業を開始し、「愛灯館東員」のリニューアルやペット葬儀も立ち上げました。

【瀬古】　果敢に挑戦を続けてこられていますね。ましてやコロナ禍においても、新たなアクションを起こしているのは実にたくましいと感じます。

【加藤】　ありがとうございます。日本のマラソンブームの開祖であり、元オリンピアンの瀬古利彦さんも、現役時代から多くの挑戦を経て成長してきたのではないでしょうか。今回はそんな瀬古さんと成長を大きなテーマに話を楽しみたいと思っています。

【瀬古】　ぜひよろしくお願いします。

【加藤】　本題に入る前に、私と瀬古さんの関係を紹介させてください。私の曽祖父・加藤喜代政は、1894（明治27）年、四日市上海老町に生まれました。尋常小学校を卒業した後は、自分の母親の実家である瀬古家の親戚をたずねたそうです。その親戚は「カネ辰」の屋号で製麺業を営んでいました。つまり、喜代政はそこに丁稚奉公に入ったわけです。もうお分かりと思いますが、この瀬古家とは瀬古利彦さんの家系です。

【瀬古】　そうだったんですね、これは初耳でした。

【加藤】　もうひとつ別のエピソードがあります。私の父と妹は、瀬古さんが出場したロサンゼルスオリンピックと、ソウルオリンピックの応援に行っています。そこで瀬古さんの走りに感銘を受けた妹は、陸上選手を志すようになったんです。結果的に選手としてオリンピック出場は叶いませんでしたが、JOCの役員選手団秘書としてアトランタオリンピックに参加しました。また、瀬古さんのご両親のご葬儀についても我が社で執り行わせていただきました。

【瀬古】　これほどのご縁があるとは驚きです。

【加藤】　ところで今、瀬古さんのオリンピック出場について触れました。日本陸上競技連盟（陸連）の副会長兼マラソンリーダーとして活動中の瀬古さんは、オリンピック出場を目指す若手と話をする機会も多いと思います。そこで、あの大舞台の出場に向けて研鑽を重ねる若手には、いつもどのような声かけを行っているのでしょうか。

【瀬古】　兼ねてから私が訴えているのは、「ポジティブでありなさい」ということです。ランナーの場合、練習にしっかり取り組んでもタイムが伸びない事態が時々起こります。「練習方針が違うのか」「体調管理ができていなかったのか」など、思考をつい悪い方に働かせてしまう選手もいますが、人間いつもベストが出せるわけではありません。勢いが乗らない時は、「今は我慢。苦しいのは後ほど調子が上がってくる兆候」と考えを正せばいい。ピンチはチャンスだということです。

【加藤】　確かに経営者の中で結果を残している人は、前向きな方が多い気がします。

【瀬古】　私は明治生まれの思想家・中村天風先生が提唱してきた“絶対積極”の教えを現役時代に知って以来、ずっとそれを心がけてきました。絶対積極とは、文字通り、積極性を絶対に失わないという意味です。悪い感情に振り回されても成長はしない。今大活躍しているメジャーリーガーの大谷翔平選手も中村天風先生の著書を読んでいたそうですよ。

目の前の出来事をプラスに考えるか、マイナスに考えるかで行動に変化が起こる。（加藤）

【加藤】　瀬古さんは、モスクワオリンピックでも代表選手に選ばれました。ただ日本はボイコットを選んだので、瀬古さんのオリンピック初出場は幻になっています。落胆されたと思いますが、そのつらさも絶対積極の考え方で乗り越えましたか。

【瀬古】　そうですね。ただつらさとかはなかったんです。とにかく日本が出るか・出ないのか結果を早く知りたかっただけでした。日本がボイコットを選んだと知った瞬間、心を覆っていたモヤが晴れたので、すぐに「次だ」と気持ちを切り替えられましたよ。年齢的にも実力的にも次のオリンピックに出られるチャンスは十分ありましたし。

【加藤】　社会人生活でもそうですよね。仕事において、自分の力ではどうにもできない場面に遭遇することがあります。運を天に任せることになった時に、求めていた結果が出なくても、引きずらないことが一番です。

【瀬古】　私はレース中も前向きですよ。マラソンは42.195kmを走り切る過酷なスポーツです。21kmの折り返し地点に到達した時、「まだ半分」と考えたらその場でへたり込みたくなっちゃいます。でも、「もう半分」と考えると、パワーがみなぎって足をどんどん前に出せるんですよ。

【加藤】　目の前の出来事をプラスに考えるか、マイナスに考えるかで行動に変化が起こるわけですね。

ライバルがいることで甘えを断つことができる。（瀬古）

【加藤】　オリンピック出場を目指すとなると、相当厳しい練習に打ち込むと思いますが、その間のモチベーションや、やる気はどう維持されるのですか。
【瀬古】　先ほどの絶対積極の考え方に通じるものがありますが、成功体験をしている自分を常にイメージすることです。レースに勝って喜んでいる自分をイメージすれば、自ずとワクワクしてきますからね。
【加藤】　ほかにもありますか。
【瀬古】　あとは、ライバルを意識することでしょうか。私が現役の頃は、双子のマラソンランナー・宗兄弟が最大のライバルでした。確か彼らは宮崎県を拠点に練習していたと思います。ある日、私がいる東京が雨模様で練習できないことがありました。ところが、宗兄弟がいる宮崎県は晴れ。そこで私は思ったんです。「こっちがオフでも、きっとふたりは練習しているだろう」と。そう思ったら「休んでいる場合じゃないな」と気持ちが切り変わって、雨の中でも懸命に練習をしました。ここで私が言いたいのは、上を目指したいなら、いくらコンディションが悪くてもがんばれということではなくて、ライバルがいることで甘えを断てるということです。加藤社長も、経営者をしているとライバル会社の存在は気になりますよね。
【加藤】　もちろんです。私の場合は、ライバル会社の戦略を気にしています。昨今葬儀業界は、家族などの少人数で行うコンパクトな葬儀が注目を集めていまして、大手の葬儀場でも家族葬専用ホールを整備しています。我が社でも冒頭で述べました株式会社秋桜のエンディングスペース事業にて家族葬の対応を始めています。ただ、注目を集めているからといって、コンパクトな葬儀ビジネスを強力に推進していくわけではありません。むしろ、逆を進む。その証として、ほくせいの本社と「エンディングサポートセンター」を併設し、大型葬にも対応できる「愛灯館 桑名」を建てました。「小さなホールが主流の今、ほくせいが戦艦をつくった」と揶揄する声も聞こえてきましたが、ライバルとは異なる戦略を展開することで存在感を示すことができます。
【瀬古】　会社員だと、同期入社の社員はライバル同士ということで切磋琢磨できそうですね。
【加藤】　おっしゃる通りです。入社したら、よきライバルを見つけてほしいですね。先輩に倣うだけでなく、ライバルの動向を気にしながら、自分のやり方や考え方をアップデートし、成長につなげてもらいたいです。

若い時こそ、失敗をたくさん経験すべき。（加藤）

【加藤】　瀬古さんは、現役を引退されたのが30歳代前半で、その後エスビー食品の陸上部監督を務めながら母校の早稲田大学でも競走部のコーチを務められました。競技者からすぐ指導者に転身して戸惑いはなかったのでしょうか。

【瀬古】　ありました。本当は海外でコーチング理論を学んでから指導者になりたかったんです。でも、学ぶ前に指導の現場に立つことになってしまった。だから、しばらくの間は、選手に走る技術を教えながらも、自分は指導技術を我流で学んでいました。「この教え方は合っているのか」なんて自問自答の日々です。ありがたいことに、現役時代の私は名選手と言っていただけました。ただスポーツ界には、「名選手、名監督にあらず」という格言が存在します。競技者としてパフォーマンスをする能力と指導者として選手を育てる能力は異なりますからね。
【加藤】　とはいえ、「あの瀬古選手が指導者になった」と周囲は騒ぎますし、結果を期待されます。
【瀬古】　そうなんです。現役時代とは異なるプレッシャーを感じていました。今も違う立場で仕事をしていますが、相応のプレッシャーを感じています。経営者も従業員の皆さんの思いを双肩に乗せて仕事するわけですから、やはりプレッシャーは相当でしょう。

【加藤】　プレッシャーのない人生というのは、あり得ないのかもしれないですね。
【瀬古】　プレッシャーがあるから、前に進めるんですよ。それに、失敗のない人生もあり得ないと思います。私は、オリンピックでは結果が出せなかった。ロサンゼルスで負けたけど、前を向いて次のソウルに出場した。そして、そこでも負けた。オリンピックの表彰台には縁がなかったけれど、それで人生がダメになったわけじゃない。また、近年陸連の仕事では、マラソングランドチャンピオンシップ（MGC）の立ち上げに関わっていますが、実現までの過程では、大いに頭を悩ませましたし、失敗もしました。若い人ばかりが失敗で悩んでいるわけではありません。
【加藤】　むしろ若い時は、失敗をたくさん経験すべきだと思います。
【瀬古】　先輩や上司が手を差し伸べてくれますからね。ちなみに、ノーベル生理学・医学賞を受賞された京大の山中伸弥教授と親しくさせてもらっているんですが、彼から「研究は失敗ばかり」と聞いたことがあります。あらゆる成功は多くの失敗の積み重ねで成り立っている。私は、そう思いますよ。失敗から得られる学びは実に多いですからね。
【加藤】　失敗を怖がって、何もできないと先に進めません。つまり成長が止まったままです。

自分の心を揺さぶる人と出会う機会がきっと訪れる。（瀬古）

【瀬古】　私は人との出会いの大切さを今の若い世代には知っておいてもらいたいと思います。中距離の選手だった私がマラソンに心血を注ごうと思ったのは、早稲田大学の競走部に入って中村清監督と出会ってからでした。初対面の時、中村監督は「早稲田低迷の原因はOBの私たちにある。許してほしい」と言って、いきなり頬を叩き始めたんです。またある時は砂浜で「この砂を食って世界一になれると言われたら、食べるか？」と聞いてきて、こちらが戸惑っていると、監督はおもむろに砂を掴んで食べ始めたんですよ。私は、「ここまでする人の指導を受ければ、自分の中で何かが変わりそうだ」という直感が働き、ついていこうと決意できたんです。いささか異例なケースですが、自分の心を揺さぶる人と出会う機会がきっと訪れると思います。
【加藤】　社会に出ればなおさら出会いの機会は増えますから、ぜひフェイス・トゥ・フェイスでの会話を楽しんでほしいです。
【瀬古】　今私は、若い人との出会いや会話が楽しくて仕方ないんですよ。自分以外の世代が何を考えているのかは、話してみないと分からない。一方、若い世代にも我々の世代が何を考えているのかを会話から引き出してほしいです。20歳も30歳も年が違えば「話かけづらい」と敬遠してしまうかもしれませんが、「若い人、ウエルカム」という年配層はたくさんいますからね。
【加藤】　私も若い人と話せる機会を大切にしています。経営者の集まりがある時は、異業種の若い経営者の話を聞くと、知見の広がりを感じるといいますか、とにかく刺激を受けるんです。
【瀬古】　私らは決して昔の武勇伝を話したいわけではないんですよね。知識をシェアして、新たな気づきを得たいだけなんです。
【加藤】　まさにそうですね。今日は瀬古さんから実りある話をたくさんいただくことができました。最後に目標を聞かせていただけますか。
【瀬古】　今後、パリオリンピックを控えていますので、選考会で優秀な選手を選び抜き、東京オリンピック以上の感動と興奮を皆さんにお届けしたいです。あともうひとつは、地方のマラソン大会の活性化に向けて協力していきたいと思っています。
【加藤】　私個人の目標としましては、我が社ならびに業界の発展を若い世代の力を大いに借りながら実現させたい。このように考えております。今日はお付き合いくださいまして、ありがとうございました。

ほくせいの
WEBページでも
読めます。